

特集 中東

深まる 日本との絆

長年にわたって情勢不安が続いてきた中東地域。
世界が平和を願うなかで、この地域と歴史的に負の関わりがなく、
政治的にも中立を維持してきた日本。
その協力は、好意的に受け入れられている。
JICAは、インフラ整備、環境、保健、教育、産業など
多岐にわたる分野での協力を推進して
毎日を力強く生きる人々を支援している。

信頼でつながる 中東と日本

資金を提供するだけでなく、
相手の立場にたって技術を伝え、人材を育てる――
この姿勢が日本人や日本企業への信頼を醸成し、
中東と日本は良好な関係を築き上げている。

パレスチナ
文化遺産を
地域の発展の一助に

文●光石達哉 写真●阿部雄介

案件名 ジェリコヒシャム宮殿遺跡大浴場保護シェルター建設及び展示計画
2018年1月～2020年5月

歴史的遺産を
両国でともに守る

パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区の町ジェリコは、紀元前1万年には人が住んでいたとされる世界最古の都市で、聖書にもたびたび登場する。8世紀にはイスラム王朝のウマイヤ朝が、この地にヒシャム宮殿を建設。初期イスラム建築の代表的な文化遺産で、単体では中東最大級といわれる大



建設現場では日本人とパレスチナ人合わせて約25人が働く。現場では日本のように標識の掲示なども徹底している。安全文化を輸出・定着させることも重要なミッションだ。

浴場のモザイク床が当時の栄華を今に伝える。

しかし、以前はこのモザイク床は保護のため砂や布がかけられていて鑑賞できず、そのため観光客が許可なく砂を掘り起こして傷つけるおそれもあった。そこで、モザイク床を保護しつつ観光客が鑑賞できるようにするドーム型シェルターの建設を、JICAが支援している。シェルター内にはモ

ザイク床を見下ろすための観賞用通路を張り巡らせる予定で、今年5月の完成を目指して工事が進められている。

シェルターの設計・施工管理を受託したマツダコンサルタントの高木政一さんは「パレスチナ観光遺跡庁は自分たちの意見を聞いてくれる協力相手を求めている、私たちはその点でいい関係を築けていると思います」と話す。「たと



改修前



「改修前はまるでヤカンのように排ガスが漏れていた」と山口さん。発電能力は定格出力の50～60%にしか満たなかった。

改修後

発電能力が定格出力の200メガワットに回復。日本の100万世帯分の電力に相当する。

イラク



積み重ねた実績が信頼を生む日本企業

案件名 ハルサ発電所改修事業
借入契約署名：2015年2月、2017年8月（フェーズ2）

イラク南部の最大都市バスラには、1982年に日本の協力で建てられたハルサ発電所がある。この地域一帯の電力供給をまかなう重要な施設で、運用や維持管理は日本人技術者から学んだイラク人技術者が行っていた。しかし湾岸戦争による損害を受けた後、老朽化も進み、経済制裁の影響による資材不足のためメンテナンスも十分でなく、発電能力が低下していた。この現状の解消にイラクは、2015年からJICAの協力を得て発電所内の四つの発電設備のうち4号機の改修を実施（17年に終了）。現在は1号機の改修を進めている。

地域一帯の電力供給を日本企業の手で



改修後の初稼働ではイラク人も日本人も大きな拍手とともに沸いた。

「4号機では建屋の屋台骨など残せそうなものは残しつつ、発電の要となる部品はほぼ交換しました。イラク人溶接士や機械工を日本に招いて技術トレーニングを行い、現地では保守・運転のための技術教育を行っています」と話すのは、プロジェクトを担当する三菱日立パワーシステムズの山口雅義さん。電力の安定供給のために導入した電子制御システムは、扱いやすいと現場でも好評だ。近隣の工科大学から学生の研修を受け入れ、日本の最新技術を学ぶ場も提供した。作業中には税関や国内で大きな資材の運搬が止められることもあったが、その都度スタッフが一丸となって遅れを巻き返した。納期通りの完成にはイラク人関係者から多くの感謝の声が上がった。



三菱日立パワーシステムズ
長崎サービス部
山口雅義
(やまぐちまさよし)さん(左)

2015年から改修事業を担当。「イラク電力省の関係者や現地職人とよく食事と一緒に汗を流すスタッフもいます」。長年、仕事をしてきたマフムド・アブドゥルラザック・イブラヒムさんと。

エジプト



確かな絆で歴史を守る

文・光石達哉 写真・阿部雄介



貴重な経験を将来に活かしてください

案件名

大エジプト博物館
保存修復センタープロジェクト
2008年6月～2016年3月
大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト
2016年11月～2021年3月

保存修復プロジェクト副総括
西坂 朗子(にしさかあきこ)さん

「博物館は200年、300年とその国の人たちが大切にしているもの。そこに日本人が貢献できたのは大きなことだと思います。ここではエジプトの貴重な文化財が来場者に親しみやすいかたちで展示されるので、今までとまったく違う経験をしてもらえるのが楽しみです」



今年中の開館を目指す大エジプト博物館。中央の入り口から左側が展示スペースで、右側には国際会議場、シアター、フードコートなど公共施設が入る。



エジプト古王国時代(紀元前2686年～紀元前2185年ごろ)のイニ・スネフェル・イシェテフ壁画の修復作業。壁画を傷つけないように泥や汚れを取り除いていく。



文化財の保存修復とともに作業し技術を伝える

ギザの三大ピラミッドのすぐそばで、古代エジプトの文化財10万点を収蔵し、5万点展示する大エジプト博物館の建設が、日本の協力で今年中の開館を目指して進められている。

その一角にある大エジプト博物館保存修復センターでも、日本人が活躍している。JICAが実施した同センターの人材育成を行うプロジェクトでは、100回以上の研修に約2250人が参加した。

研修終了後、2016年から日本人とエジプト人が合同で文化財の保存修復を行うプロジェクトが始まった。特に貴重な文化財の修復を一緒にしながら、その技術を現地スタッフに伝えている。ツタンカーメン王の衣服などを扱う染織品部門のリーダー、モハメッド・アヤドさんは「修復と同時に分析、記録をとる作業も大事です。日本の協力なしで今のレベルの修復は実現できなかった」と感謝する。



大エジプト博物館
保存修復センター
保存修復担当 所長
フセイン・カマルさん

「日本人とは2008年から一緒に仕事をして多くのことを学びました。その中で一番重要なのは、しっかり計画を立てること。最初、エジプト人には早く作業を終わらせたい気持ちがありましたが、プロジェクトを通して迅速性と計画性をバランスよくしっかりできるようになりました」

プロジェクト副総括の西坂朗子さんは「修復の技術自体は日本独自のものではなく、国際標準のもです。しかし、コンピューターやX線などいろんな分野の専門家が一緒に学際的に取り組むチームワークは日本の強みで、今後エジプトでも続けてもらいたいと思って伝えていきます」と語る。

間もなく開館する博物館で展示される貴重な文化財の陰には、日本とエジプトの長年にわたる協力と絆がある。

高さ約11mのラムセス2世像。1820年にメンフィスで発見され、直近ではカイロ市内で約50年展示された後、2018年1月に同博物館入り口に置かれた。



Column

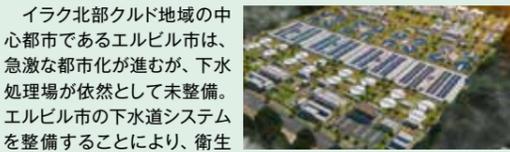
イラク 進む! 日本のインフラ整備

イラクは度重なる戦争、イスラム国 (ISIL) の侵攻などにより、老朽化するインフラ施設の更新が進んでいない。JICAは日本の技術を役立てる本邦技術活用条件 (STEP) を適用した協力にも取り組んでいる。



案件名 バスラ製油所改修事業
借入契約署名:2012年10月(第一期)、2019年6月(第二期)

老朽化や戦争によって製油所の設備能力が低下し、産油国にもかかわらず石油製品を他国から輸入するイラク。南部のバスラ製油所の改修を行い、現代の環境基準に適合する高品質な国産石油製品を増産させ、経済復興を後押しする。



案件名 クルド地域下水処理施設建設事業(I)
借入契約署名:2015年6月

イラク北部クルド地域の中心都市であるエルビル市は、急激な都市化が進むが、下水処理場が依然として未整備。エルビル市の下水道システムを整備することにより、衛生環境の改善を図る。



イラク事業の動画を JICA YouTube ページで公開中!

<https://youtu.be/hv8yBrzMOTY>



そして今、4号機の改修で顔なじみになった人たちは1号機での作業に力を注いでいる。

昨年、イラクと日本は国交樹立80周年を迎えた。その間に多くの日本企業がイラクの発展に協力してきた。確かな実績の積み重ねが、強固な信頼を築き上げている。